

重点取組分野	令和 元 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①一人一人が自分の考えをもち、互いに認め合い高め合えるようにするとともに、スキル学習の充実を図り、基礎基本の定着を目指す。②「教科等横断的に育成を目指す資質・能力」読書活動を啓発し、語感を高め、自己を豊かに表現できる子を育成する。	○基礎・基本の定着に向けてスキルタイム学習を進めた。内容の充実が求められる。○新学校教育目標の実現に向けた「教科等横断的に育成を目指す資質・能力」のイメージを共有し、授業研究会を通して検証することができた。	B
豊かな心	①学校生活全般を通して、一人一人のよさを認め、自己肯定感を高める。②あいさつ運動を通して、気持ちのよい挨拶や、礼儀正しい態度を学び、思いやりや感謝の心をもつ子を育成する。③人権委員会での取り組みを通して、人権意識の向上に努め、誰もが安心して過ごせる学校を目指す。	○児童のアンケート結果から、自己肯定感を一層高める指導の充実が求められる。○あいさつ運動では、中学校を招く日も設定し、継続的に取り組んだ。○人権週間や子ども会議等の活動を通して、人権意識の向上に努めた。	B
健やかな体	①「台小体カアッププロジェクト」の運動集会を通じて、児童が運動の楽しさを味わい、外遊びを盛んにしたり、体力の向上に目を向けたりするように心がける。②学校保健委員会での清掃についての活動を通して、生活環境に対する関心を高め、清潔な環境で生活するよさを実感できる子の育成を図る。	○体カアッププロジェクトでの長編1000回チャレンジが4年目を迎え、冬季に運動に親しむ環境ができた。夏季の環境づくりが課題である。○学校保健委員会を全校参加とし、清掃指導の充実を図った。定着に向けての取り組みに課題が残った。	B
特別支援教育	①校内委員会の設置、校内研修の実施等、校内支援体制を整え、配慮の必要な児童に対する共通理解を図る。②学習環境の整備を行い、フロントゼロや掲示資料のユニバーサルデザイン化を進める。	○コーディネーターを中心に校内研修を行った。また児童の困り感について共通理解を図り、保護者とともに個別の支援計画を作成し、算数科の取り出し指導を行った。○学習環境のユニバーサルデザイン化に努めた。	B
児童生徒指導	①「六つ川台小スタンダード」の定着に向け、家庭への冊子配付や各学級での指導ファイル作成など、指導環境を整えるとともに、適時会議をもち、内容の加筆や修正を行う。②児童理解についての情報交換の場を設定し、職員全体で指導にあたる。	○日常指導から児童の実態を把握し、家庭訪問や個人面談を通して保護者への理解を求めるとともに、学年末にスタンダードの加筆・修正を全職員で行った。○児童理解委員会を毎月開催し、児童間の問題や気になる児童についての情報を共有した。	B
地域連携・学校運営協議会	①学校説明会、懇談会、まち懇等の機会に、学校経営方針や目指すべき児童の姿等を説明し、学校への理解を深める。②地域行事に積極的に参加し、保護者や地域の方々と交流を深める。③学校ホームページを活用、発信し、学校の活動を周知できるよう努める。	○学校説明会やまち懇の場において、学校経営方針の説明や学校評価の報告を行うとともに、改善点についての理解を求めた。○地域行事に積極的に参加し交流を深めた。○ホームページの更新に努め、継続的に情報を発信して、学校への理解を深めた。	B
いじめへの対応	①毎月「いじめ防止対策委員会」を設け、認知された案件の経過を丁寧に確認するとともに、未然防止、再発防止に努める。②教職員の研修を通じて、いじめに対する教職員のアンテナを高くする。③年3回のアンケートを行い、児童や学級風土の変化を見逃さない体制をつくる。	○学校いじめ防止対策委員会を毎月開催し、情報の共有、組織的対応を図った。○研修を通じ、いじめに対する知識を深めた。○YPAアセスメントシートを活用し、児童の実態把握に努めた。子どもの実態や変容を密に読み取ることが必要だと感じられた。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①5年次以下の教諭を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが推進役となって互いに授業公開をし、板書や発問等の指導技術の向上を図る。②教務会を定期的に実施し、計画的な学校経営や行事推進に努める。③職務の外部委託や職員室アシスタントとの業務連携など、職員の作業の簡便化・効率化を図り、働き方改革につなげる。	○メンターチームによる特別活動や道徳、外国語の授業づくりなどについての研修が有意義であった。○教務会をほぼ毎週開催し、計画的な学校運営に努めた。○アシスタントと連携し、校務の負担軽減を図った。会議や作業の効率化にも努めた。	B
ブロック内評価後の気付き	○ブロック内で人権教育に視点を当て、授業を見合う機会を設けて、討議を行うことにより、教科としての道徳につながる取り組みができた。○領域での授業交流は、小中ともに外国語・特別活動・道徳・総合に絞ることで、9年間で育てる力のためにより活発な意見交換が展開された。○地域PTAとともに、SNSについての取り組みを進めたことを区内の専任協議会につなげた。	○児童生徒指導・人権教育・特別活動・特別の教科「道徳」に視点を当て、「自己肯定感を高めるための取り組み」について話し合う機会を設け、ブロック内で共有した。○今年度は授業交流ができなかったが、生活・学習意識調査を実施し、教科毎に考察を行った。次年度以降の授業交流に役立て、併せて「9年間で育てる8つの力」の獲得に生かしたい。○専任協議会を中心とした南区一斉の取り組みとして、ネット社会との付き合い方について標語応募や投票を行った。各校での深化にむけてブロック子ども会議で検討し、次年度へつなげる。	B
学校関係者評価	◇学校評価アンケートから、他の取り組みと比べると「進んであいさつ」「よさを認める」について自信をもちにくいようである。まちの大人から進んで声をかけてほしい。◇未就学児からシニアまでが、まちの行事を通じて「つながる」ことができている。関係団体との「つながり」により拡大してきた行事も多く、プラレール大会などでは寄付によって子から子へ物を大切に「つなぐ」ことができている。六つ川台のまちのよさに改めて気付く。	◇学びの楽しさを感じることができている児童が多いため、読書活動や家庭学習などへの継続的な取り組みを推進し、学びの習慣づくりにつなげたい。◇あいさつやルールについて、児童の意識と保護者や教職員の評価に差が見える。周囲の大人が示範し、礼儀やマナーを重んじることができると子ども達を育てたい。◇自他ともに大切にしていける気持ちを一層育むため、温かい言語環境づくりに取り組む。互いに認め合い、支え合う経験を通じ、自己肯定感を高めるとともに、一人一人のもつ優しさを豊かにしていきたい。	B
中期取組目標振り返り	○育成を目指す資質・能力を明確にした授業研究会の取り組みにより、学力向上の兆しが見えてきた。○縦割り活動や挨拶運動の取り組みもあり、顔を知り合う関係ができているが、気持ちのよい挨拶や礼儀正しさ、思いやりや感謝の気持ちという面で課題が残った。○学校保健委員会の活動により、各学級に清掃目標を設定し、清掃指導の充実を図ったが、継続が必要である。○一校一実践が定着してきた。さらに改善を図りながら、引き続き体力の向上を図っていく。	○育成を目指す資質・能力を明確にした授業研究会の取り組みを一段階引き上げ、「ともに考え」「行動する」姿を追求していきたい。○ベア学年を生かした取り組みもあり、顔を知り合う関係ができているが、気持ちのよい挨拶や礼儀正しさ、思いやりや感謝の気持ちという面で課題が残った。人権意識向上の手立てが求められる。○制限下にあっても、運動に親しむ姿が多く見られる。技能面(特に敏捷性・巧緻性)を高めたい。○配慮を要する児童への支援が充実してきた。職員間のスタンダードの共通理解を進めたい。	

重点取組分野	令和 2 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①スキル学習の充実を図り、語感を高め、基礎基本の定着を目指すとともに、一人一人が自分の考えをもち、互いに認め合い高め合えるようにする。②「教科等横断的に育成を目指す資質・能力」の獲得を目指し、算数科の授業を柱に研究を推進する。	○基礎・基本の定着に向けてスキルタイム学習を進めた。自己確認表で成果の視覚化を図った。○「自ら学び」とも考え行動する「台小の子」育成に向け、成長過程における具体的な獲得を目指し、算数科での自力解決場面を柱に検証することができた。	B
豊かな心	①学校生活全般を通して、一人一人のよさを認め、自己肯定感を高める。②あいさつ運動を通して、気持ちのよい挨拶や、礼儀正しい態度を学び、思いやりや感謝の心をもつ子を育成する。③人権委員会での取り組みを通して、人権意識の向上に努め、誰もが安心して過ごせる学校を目指す。	○児童のアンケート結果から、引き続き自己肯定感を一層高める指導の充実が求められる。○ディスタンスに配慮し、あいさつ放送を継続した。進んであいさつできる児童の割合は十分と言えない。○人権週間や子ども会議等の活動を通して意識の向上に努めた。上学年ほど人権への配慮に欠ける表現が気になる。	B
健やかな体	①「台小体カアッププロジェクト」の運動集会を通じて、児童が運動の楽しさを味わい、外遊びを盛んにしたり、体力の向上に目を向けたりするように心がける。②学校保健委員会での清掃についての活動を通して、生活環境に対する関心を高め、清潔な環境で生活するよさを実感できる子の育成を図る。	○体カアッププロジェクトでの長編1000回チャレンジが5年目を迎え、冬季に運動に親しむ環境ができた。コロナ禍での環境づくりが課題である。○コロナ禍で、手洗いに関する関心は非常に高かった。マスクはほぼ徹底できたが、ハンカチの携行や距離の確保に課題が残った。	B
特別支援教育	①校内委員会の設置、校内研修の実施等、校内支援体制を整え、配慮の必要な児童に対する共通理解を図る。②学習環境の整備を行い、フロントゼロや掲示資料のユニバーサルデザイン化を進める。	○コーディネーターを中心に校内研修を行った。また児童の困り感について共通理解を図るとともに、関係機関と連携し指導に生かした。取り出し指導の充実を図った。適時ケース会議を実施し、目標修正を図った。○板書の統一など、学習環境のユニバーサルデザイン化に努めた。	B
児童生徒指導	①「六つ川台小スタンダード」の定着に向け、家庭への冊子配付や各学級での指導ファイル作成など、指導環境を整えるとともに、適時会議をもち、内容の加筆や修正を行う。②児童理解についての情報交換の場を設定し、職員全体で指導にあたる。	○日常的に児童の実態把握に努めた。家庭訪問や個人面談を通して保護者への理解を求めるとともに、学年末にスタンダードの加筆・修正を全職員で行った。テレビ朝会や昼の放送を活用して指導の全体化を図った。○児童理解委員会を毎月開催し、児童間の問題や気になる児童についての情報を共有した。	B
地域連携・学校運営協議会	①学校説明会、懇談会、まち懇等の機会に、学校経営方針や目指すべき児童の姿等を説明し、学校への理解を深める。②地域行事に積極的に参加し、保護者や地域の方々と交流を深める。③学校ホームページを活用、発信し、学校の活動を周知できるよう努める。	○学校説明会やまち懇の機会に、学校経営方針の説明や学校評価の報告を行うとともに、改善点についての理解を求めた。○今年度は感染症拡大防止の観点から、地域行事の実施が難しかった。○学校と家庭との連携を図ることをねらい、ホームページ更新およびメール配信充実にも努めた。	B
いじめへの対応	①毎月「いじめ防止対策委員会」を設け、認知された案件の経過を丁寧に確認するとともに、未然防止、再発防止に努める。②教職員の研修を通じて、いじめに対する教職員のアンテナを高くする。③年3回のアンケートを行い、児童や学級風土の変化を見逃さない体制をつくる。	○学校いじめ防止対策委員会を毎月開催し、情報の共有、組織的対応を図った。○研修を通じ、いじめに対する知識を深めた。○YPAアセスメントシートを活用し、児童の実態把握に努めた。いじめアンケートをグラフ化し、比較できるようにしたこと、学級風土のチェックにつながった。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①5年次以下の教諭を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが推進役となって互いに授業公開をし、板書や発問等の指導技術の向上を図る。②教務会を定期的に実施し、計画的な学校経営や行事推進に努める。③職務の外部委託や職員室アシスタントとの業務連携など、職員の作業の簡便化・効率化を図り、働き方改革につなげる。	○メンターチーム主導による授業を伴う研修が有意義であった。○教務会をほぼ毎週開催し、計画的な学校運営に努めた。○アシスタントと連携し、校務の負担軽減を図った。会議や作業の効率化にも努めた。○アシスタントと連携し、校務の負担軽減を図った。会議や作業の効率化にも努めた。	B
ブロック内評価後の気付き	○ブロック内で人権教育に視点を当て、授業を見合う機会を設けて、討議を行うことにより、教科としての道徳につながる取り組みができた。○領域での授業交流は、小中ともに外国語・特別活動・道徳・総合に絞ることで、9年間で育てる力のためにより活発な意見交換が展開された。○地域PTAとともに、SNSについての取り組みを進めたことを区内の専任協議会につなげた。	○児童生徒指導・人権教育・特別活動・特別の教科「道徳」に視点を当て、「自己肯定感を高めるための取り組み」について話し合う機会を設け、ブロック内で共有した。○今年度は授業交流ができなかったが、生活・学習意識調査を実施し、教科毎に考察を行った。次年度以降の授業交流に役立て、併せて「9年間で育てる8つの力」の獲得に生かしたい。○専任協議会を中心とした南区一斉の取り組みとして、ネット社会との付き合い方について標語応募や投票を行った。各校での深化にむけてブロック子ども会議で検討し、次年度へつなげる。	B
学校関係者評価	◇学校評価アンケートから、他の取り組みと比べると「進んであいさつ」「よさを認める」について自信をもちにくいようである。まちの大人から進んで声をかけてほしい。◇未就学児からシニアまでが、まちの行事を通じて「つながる」ことができている。関係団体との「つながり」により拡大してきた行事も多く、プラレール大会などでは寄付によって子から子へ物を大切に「つなぐ」ことができている。六つ川台のまちのよさに改めて気付く。	◇学びの楽しさを感じることができている児童が多いため、読書活動や家庭学習などへの継続的な取り組みを推進し、学びの習慣づくりにつなげたい。◇あいさつやルールについて、児童の意識と保護者や教職員の評価に差が見える。周囲の大人が示範し、礼儀やマナーを重んじることができると子ども達を育てたい。◇自他ともに大切にしていける気持ちを一層育むため、温かい言語環境づくりに取り組む。互いに認め合い、支え合う経験を通じ、自己肯定感を高めるとともに、一人一人のもつ優しさを豊かにしていきたい。	B
中期取組目標振り返り	○育成を目指す資質・能力を明確にした授業研究会の取り組みにより、学力向上の兆しが見えてきた。○縦割り活動や挨拶運動の取り組みもあり、顔を知り合う関係ができているが、気持ちのよい挨拶や礼儀正しさ、思いやりや感謝の気持ちという面で課題が残った。○学校保健委員会の活動により、各学級に清掃目標を設定し、清掃指導の充実を図ったが、継続が必要である。○一校一実践が定着してきた。さらに改善を図りながら、引き続き体力の向上を図っていく。	○育成を目指す資質・能力を明確にした授業研究会の取り組みを一段階引き上げ、「ともに考え」「行動する」姿を追求していきたい。○ベア学年を生かした取り組みもあり、顔を知り合う関係ができているが、気持ちのよい挨拶や礼儀正しさ、思いやりや感謝の気持ちという面で課題が残った。人権意識向上の手立てが求められる。○制限下にあっても、運動に親しむ姿が多く見られる。技能面(特に敏捷性・巧緻性)を高めたい。○配慮を要する児童への支援が充実してきた。職員間のスタンダードの共通理解を進めたい。	

重点取組分野	令和 3 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①スキル学習の充実を図り、語感を高め、基礎基本の定着を目指すとともに、一人一人が自分の考えをもち、互いに認め合い高め合えるようにする。②「教科等横断的に育成を目指す資質・能力」の獲得を目指し、算数科の授業を柱に「ともに考える」研究を推進する。		
豊かな心	①学校生活全般を通して、一人一人のよさを認め、自己肯定感を高める。②あいさつ活動やあせかけ運動を通して、気持ちのよい挨拶や礼儀正しい態度を学び、思いやりや感謝の心を育成する。③人権委員会での取り組みを中心に、人権意識の向上に努め、誰もが安心して過ごせる学校を目指す。		
健やかな体	①「台小体カアッププロジェクト」の運動集会を柱に、児童が運動の楽しさを味わい、外遊びを盛んにしたり、体力の向上に目を向けたりするように心がける。②学校保健委員会でのけがの予防についての活動を通して、環境と行動について関心を高め、安全に生活するよさを実感できる子の育成を図る。		
特別支援教育	①校内委員会の設置、校内研修の実施等、配慮の必要な児童に対する共通理解を進めるとともに、特別支援教育支援員やボランティアの活用を行い、校内支援体制を整える。②学習環境の整備を行い、フロントゼロや掲示資料のユニバーサルデザイン化を進める。		
児童生徒指導	①「六つ川台小スタンダード」の定着に向け、家庭への冊子配付や各学級での指導ファイル作成など、指導環境を整えるとともに、適時会議をもち、内容の加筆や修正を行う。②児童理解についての情報交換の場を設定し、職員全体で指導にあたる。		
地域連携・学校運営協議会	①学校説明会、懇談会、まち懇等の機会に、学校経営方針や目指すべき児童の姿等を説明し、学校への理解を深める。②地域行事に積極的に参加し、保護者や地域の方々と交流を深める。③学校ホームページを活用、発信し、学校の活動を周知できるよう努める。		
いじめへの対応	①毎月「いじめ防止対策委員会」を設け、認知された案件の経過を丁寧に確認するとともに、未然防止、再発防止に努める。②教職員の研修を通じて、いじめに対する教職員のアンテナを高くする。③年3回のアンケートを行い、児童や学級風土の変化を見逃さない体制をつくる。		
人材育成・組織運営(働き方改革)	①5年次以下の教諭を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが推進役となって互いに授業公開をし、指導技術の向上を図る。②教務会を定期的に実施し、計画的な学校経営や行事推進に努める。③職務の外部委託や職員室アシスタントとの業務連携、ビジネスチャットツールなど、職員の作業の簡便化・効率化を図り、働き方改革につなげる。		
ブロック内評価後の気付き	○ブロック内で人権教育に視点を当て、授業を見合う機会を設けて、討議を行うことにより、教科としての道徳につながる取り組みができた。○領域での授業交流は、小中ともに外国語・特別活動・道徳・総合に絞ることで、9年間で育てる力のためにより活発な意見交換が展開された。○地域PTAとともに、SNSについての取り組みを進めたことを区内の専任協議会につなげた。		
学校関係者評価	◇学校評価アンケートから、他の取り組みと比べると「進んであいさつ」「よさを認める」について自信をもちにくいようである。まちの大人から進んで声をかけてほしい。◇未就学児からシニアまでが、まちの行事を通じて「つながる」ことができている。関係団体との「つながり」により拡大してきた行事も多く、プラレール大会などでは寄付によって子から子へ物を大切に「つなぐ」ことができている。六つ川台のまちのよさに改めて気付く。		
中期取組目標振り返り	○育成を目指す資質・能力を明確にした授業研究会の取り組みにより、学力向上の兆しが見えてきた。○縦割り活動や挨拶運動の取り組みもあり、顔を知り合う関係ができているが、気持ちのよい挨拶や礼儀正しさ、思いやりや感謝の気持ちという面で課題が残った。○学校保健委員会の活動により、各学級に清掃目標を設定し、清掃指導の充実を図ったが、継続が必要である。○一校一実践が定着してきた。さらに改善を図りながら、引き続き体力の向上を図っていく。		